



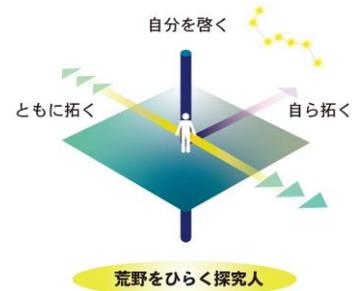
生徒指導だより

令和6年5月27日号
岐阜北高等学校生徒指導部

1. リーダーとしての存在感

「学校とは生徒主体の場であるべきだ」というのが私の意見です。これはダメ、あれはダメと生徒を“管理・統制”するのではなく、生徒一人ひとりが責任をもって考え、生徒が生徒に働きかけ、生徒が善をなそうと自ら判断し、生徒が生徒の手で様々なことを決定し、自治する。それが、右のロゴマーク「スクール・ポリシー」のイメージ図だと思います。

図中の中央にいるみなさんは、どの方向に進むか自分で考え、自分の意思で決め、進む。部活動を含む特別活動、特に学校行事は「荒野をひらく探究人」に成長するための礎を育む最高・最良の場であり、そうあってほしいと願っています。



先日、応援団長の4名が私のもとを訪ねてきてくれ、今年の北高祭に対する熱い思いをぶつけてくれました。学校のリーダー的存在である応援団とは、体育祭の演舞に終始するだけではなく、生徒会や体育委員とともに体育祭実行委員のような存在であり、応援合戦だけでなく、事前の会場設営、集合時の団の統制、競技の招集、競技の運営や競技者へのエール、団席の管理、後片付けなど、率先して活動する応援団の姿を見て、各団員が一致団結できるでしょう。それこそが応援団としてのプライドだと思います。いよいよ放課後の応援団の活動が始まりました。活気ある声が学校内に響き渡っています。先日の彼らの意気込みから、今年の北高祭では大きな花を咲かせてくれることを予感させてくれます。

また、生活委員会が中心となって、今後予想される酷暑への対応(服装に関して)を検討してくれています。生活委員長が職員会議において、先生方へ自分たちの考えと方策を提案してくれました。学校運営に生徒が参画する、こんな素敵なことはありません。5月24日(金)情報モラル講話後の生徒会副会長からの「視野が20%狭くなる歩きスマホ、校内での歩きスマホやめてみませんか」という素敵な提案、球技大会の服装規定に関して話し合いを続けてくれている生徒会や体育委員、当日お手伝いをするMSリーダーズたち、生徒が自分で決めていくことができる北高へ、生徒と決めていける北高へ、それぞれの人が持てる英知を使ってそれぞれの形で力を発揮できる学校になりつつあると実感をしているところです。

2. 責任と判断

私の好きな映画の話をしてします。たしか10年ほど前だったと思います。ハンナ・アーレントという哲学者自身が日本でブームになっていました。代表的な著書は「エルサレムのアイヒマン」。ブームの火付け役は同名の「ハンナ・アーレント」という映画です。この映画は、2012年東京国際映画祭で絶賛され、そして、東京の劇場では大ヒットしたそうです。このような地味な、しかも万人受けしそうな硬派な映画が評判を呼んでいるということで、私は東京という都市の多様性と懐の深さを感じたことを覚えています。



映画「ハンナ・アーレント」のあらすじを少し綴ります。ハンナ・アーレントはナチスからの迫害を逃れてアメリカに亡命したユダヤ人の哲学者。戦後彼女は、雑誌社の特派員として、ユダヤ人のホロコーストに関与したドイツ人将校・アイヒマンの戦争裁判を傍聴する機会が与えられます。極悪非道でとんでもない人物だと彼女は想像していましたが、裁判の場で彼女が目にした彼は決して極悪人という感じの人物ではなく、どこにでもいるありふれた、出世欲にかられた、むしろ有能な官僚のように映りました。

その後、彼女はこの裁判について特派員報告を行います。その報告の中でアイヒマンは極悪非道というイメージからほど遠いごく普通の凡庸な人物であることや、ユダヤ人の指導者の中にもナチスの行為に加担した者がいるという事実を記事にします。このことが原因で、彼女はユダヤ人社会から激しい批判を浴びます。その内容は「ホロコーストに関わったアイヒマンを擁護するのか!」、あるいは「ユダヤ人指導者に対する言及については民族の恥をさらすのか!」、「我々ユダヤ民族に対する愛はないのか!」等々。激しい非難のなかで大学の教職を辞職するよう求められた中で、学生への講義で魂を揺さぶる8分間のスピーチが映画中で最大の見どころです。

ハンナ・アーレントはこの講義(映画)の中で「善悪を見分ける力は、考えることによってしか得られない。悪とは決して特別なものではない、社会の中で普通の人が何らかの原因で思考停止に陥ったとき、彼らは人間性を失い、とんでもない悪事を働くことがある」と主張し、これを「悪の凡庸さ」と名付けました。「もっとも醜い悪とは、判断力と責任感覚と善への意思を欠いたごく普通の凡庸さから生まれる」ということも語っています。

さて、ここで「責任と判断」というポイントを絞って話をしてみたいと思います。これだけ変化の早い現代社会では、従来の秩序感が機能しない、既存のモラルだけでは現実に対処できない状況が多々ありますよね。私を含めて多くの凡庸な人が日々の忙しさに流されて、十分に考えずに安易に物事を行えば、とんでもない過ちを引き起こす可能性を常に持ち合わせています。陳腐で浅薄で思考が浅く、責任をもって善とは何かを自ら判断して動こうとしない、というところから悪が生まれてしまう。「悪の凡庸さ」に陥らないため、毎日考え抜くことが何より大切ではないかと私は思っています。最近は何も忘れも多くなり、深く考えず安易に物事を進めようとするれば思わぬ失敗をするのではないかと心配になることがあります。そんなときは、いや待て! 落ち着いて考えろ! もう一度考えなおしてみろ! と心の中で繰り返すようにしています。

あなたは どう 思いますか?